

旧加賀藩政時代の虫塚から 学ぶこと (続編・その2)

石川県農業総合研究センター
資源加工研究部 生物資源グループ

専門研究員 森川千春

<陰陽道と虫塚>

陰陽道とは古代中国に発生した陰陽五行説を中心とする思想と技術であり、天体の運行と人間社会の移り変わりが関係し合う(天人相感)とし、吉凶を天文の変化から予知し対処するものである^{54, 56)}。わが国においては律令制にとり入れられ⁵⁵⁾、天武天皇(在位673~686年)により設置された陰陽寮は^{39, 56)}、天文、暦、気象、卜占(占い)、相地(土地の吉凶を判断する)、漏刻(水時計)などを掌った⁵⁶⁾。九世紀中頃から史料に現われる陰陽道祭祀は、蝗害を防ぎ、疫癘(疫病)をはらい、五穀豊穰を祈念する公的祭祀(高山祭、鬼気祭、雷公祭など)が中心であった⁶⁰⁾。「三代実録」貞観元年(859年)八月には、「董仲舒祭法」に基づき「螟螣賊害五穀之時…解之攘之(螟螣賊、五穀を害するとき…これを解きこれを攘う)」とある^{14, 45)}。董仲舒は前漢の儒家で、経学と陰陽五行説を結びつけ天人相感の思想を大成した人物である⁶⁰⁾。「除蝗録」¹²⁾の記述によると「螟」は「イナゴ」、「螣」は「実盛虫」すなわちウンカ・ヨコバイ、「賊」は「小形で節を食い穂を枯らす」すなわちニカメイチュウであろうと思われる。その後、次第に貴族個々の攘災・延命を目的とした祭祀が行われるようになるが⁶⁰⁾、いわゆる宮廷陰陽道は平氏全盛から没落期にかけ天文の変異から政界の動向を占った陰陽頭・安倍泰親の頃を頂点とする⁵⁵⁾。令制では「天文密奏」の制度があり、陰陽寮の天文博士は、天体の変異を直接天皇に奏上する定めであった⁴²⁾。中世になると宮廷陰陽師は武家奉仕と公家奉仕に分裂し、あるいは民間に四散し、陰陽道は社会の広域に及ぶことになる²¹⁾。宿曜道や密教との交渉が盛んとなり、修験道の要素も渾然一体

となり中世的な習合宗教となっていった⁵⁷⁾。陰陽師の中には、武家奉仕のために京の都を捨てるもの、有力社寺へ身を寄せるもの、職田などがあるゆかりの地へ下るもの、放浪するものなどが出て「陰陽師の田舎わたらい」と称された¹⁷⁾。宮廷陰陽道を支えてきた賀茂・安倍の両家のうち、賀茂家は永禄八年(1585年)賀茂在富の死によって絶え、安倍(土御門)家も秀吉の勘気に触れて(秀頼を呪詛したともいわれる¹⁸⁾)一時追放される。秀吉は「陰陽道は国家を犯道也、治平の世にハ不益の物也」と言ったとされ¹⁸⁾、この処分は土御門家のみにとどまらなかった。陰陽師はことごとく職を取り上げられ(陰陽道闕職)、尾張国の荒地の開墾へと駆り出された¹⁸⁾。関ヶ原合戦後、土御門家は宮廷出仕を再開し¹⁷⁾、近世には安倍晴明の末裔という土御門家を宗家とする神道の形態の「天社土御門神道」の体制となった²¹⁾。陰陽師は、古くは術者としての神秘性から「見鬼者⁴⁵⁾」(鬼を見る者)とされ、後にはその技術面から「司天輩¹⁶⁾」(天を司る輩)と呼ばれた。

十村役・田中家に「鬼一法眼末裔之由代々伝承仕候」²⁷⁾と伝わる「鬼一法眼」は「陰陽師の法師⁴⁰⁾」(法師陰陽師・民間陰陽師)である。正確無比な計算で大和比を用いた、虫の俵の配分・石碑の高さ・碑文・石碑の配置には、「算置」とも呼ばれ荒地の開墾にも利用されたという陰陽師の測量技術¹⁸⁾があらわれている。域内への侵入路を遮断する形の「結界による除災」は陰陽道の「疫神祭」(道と堺の祭)¹²⁾の流れをくむものであろう。東西南北に正対した四辺形に設定された戌亥(西北)と辰巳(東南)の「方位除け」は「四角祭」(京城の四隅、すなわち、乾・艮・巽・坤で疫鬼の侵入を防ぐ)を想起させる^{14, 26)}。

田中家の系図には「石川郡山嶋の郷宮丸村ニ往昔鬼一道場ト申有之 則チ鬼一法眼末孫・有故宮丸村ニ止リ」²⁷⁾とあり、鬼一法眼の末裔が「故有り」山嶋郷宮丸村(旧・松任市:現・白山市宮丸町)にとどまり鬼一道場を開いていた。「故有り」は前述の「陰陽師の田舎わたらい」や「陰陽道闕職」だったかもしれない。

田中家は陰陽師であり、本当に鬼一法眼の末裔だったと推定したい。この前提で虫塚の立地環境

を見ると多くのことが繋がってくるのである。

徳橋神社は元、「稲荷社」であった²⁷⁾。安倍晴明の母親が信太森葛葉稲荷神社（大阪府和泉市葛ノ葉町）の白狐・葛の葉⁵³⁾とされるように陰陽師と稲荷は密接な関連がある。旧国府村地内二十二社のうち稲荷神を祀るのは、この埴田のひとつだけである²⁷⁾。陰陽師の系譜を有する者が徳橋組に移住するにはまさにここ埴田しかない。

鬼一法眼は「鬼一法眼社」として「鞍馬寺」境内に祀られている。そして「鞍馬寺」を模して坂上田村麻呂が建立した「西光寺」（達谷ヶ窟）が奥州平泉にある¹⁾。奥州平泉中尊寺には一山の鎮守として「白山社」（白山権現社）があり^{2, 3)}、江戸期に別当として白山の山上諸社を管理していたのは越前勝山の「白山平泉寺」であった¹⁴⁾。越前平泉寺縣社白山神社由緒略記⁴⁷⁾には「源九郎判官義経が北國落には平泉寺觀音堂に宿り、管絃の妙にて衆徒の心を和げ」ともあり、奥州平泉と越前平泉寺の密接な関係が浮かび上がる。また、「白山記」には、藤原秀衡が白山頂上の社殿に身の丈五尺の金銅像を鑄造して寄進したとあり、しかもこれは秀衡在世中に書かれた記事である³⁸⁾。白山信仰を通して、徳橋組でも奥州・西光寺の情報は有していたはずである。岩淵の「西光寺跡」を鞍馬寺ゆかりの地、そして父祖や陰陽師ゆかりの地と認識したのではないだろうか。

引越十村として「稲荷社」のある「埴田」への転入、「西光寺」跡への「岩淵の虫塚」の建立、ともに偶然ではなく故意・作為的にピンポイントで選定された気配がある。

＜里神楽と陰陽道＞

それでは「花祭り」と陰陽道の関係はどうだろうか。「花祭り」は里神楽の中の舞型神楽、さらにその中の湯立神楽（霜月神楽）に属する⁴¹⁾。西角井は「神学研究」で、里神楽において陰陽五行の所作のない処はなく、その養成・発達の過程を理解するには陰陽道に過ぎないとして目を背けるべきではない⁵⁴⁾、とした。村山⁵⁴⁾はこれを受け「陰陽五行思想抜きで里神楽が考えられなくなったのは、これが法師陰陽師たる修験者の長きにわたる歴史的な管掌のあとを物語るものである」と述べている。舞の基本⁵⁴⁾とされる五方（東西南北中央）、

順逆順（天地人左右左）、反閉（大地を踏みしめ清める）、契印（指で印を結ぶ）、九字壺きり（臨兵闘者皆陣列在前）、などは、すべて「花祭り」の中に見られる⁴¹⁾。舞人が舞台を対角線にあるいは十字形に動き回るのは、陰陽道における北極星祭・太一神祭・九曜祭・五星祭・七十二星祭から来たものであろうと論じられている⁵⁴⁾が、これも「花祭り」の「地堅」の舞に見られる⁵⁾。

「花祭り」は牛頭天王信仰も取り入れている。「花祭り」は拍子や舞式の相違から「大入系」と「振草系」に分けられるが、より古式をとどめるものの現在、廃絶している「大入花祭り」には「牛頭天王嶋渡」「牛頭天王五段式」の祭文が伝えられている⁴¹⁾。祇園社（八坂神社）の祭神・牛頭天王は、宮廷陰陽道の形骸化と、世俗陰陽道の進出の過程で陰陽道に取り入れられていき、十四世紀には安倍晴明の選（実際の著者は祇園社の僧・晴朝）とする陰陽道の聖典「三國相伝陰陽輶轄簠簋内傳金烏玉兔集」の中核をなすものになり、晴明の名を持って権威付けられた⁵⁴⁾。

神楽行事は民族的な土公祭と結びつくことによって一段と陰陽道的要素を強めることがある⁵⁴⁾。土公神は竈神である荒神と習合し、「花祭り」にも「荒神祭り」が入っている⁴¹⁾。備後国神石郡豊松の土公祭の五行祭文には五方（東西南北中央）にあてて「東方久々能知命は青き御簠を」「南方火具土命は赤き御簠を」「西方金山彦命は白き御簠を」「北方水波女命は黒き御簠を」「中央埴安彦命は黄なる御簠を」と方位神と五色を配当し⁵⁴⁾、「中央」に「埴」の字が見える。五行の木火土金水のうち、五方の「中央」にあてられるのは「土」で、埴安彦命は「土祖」あるいは「土神將軍」ともされる⁵⁴⁾。五行についての最初の記載である「尚書」の「洪範篇」には「水は潤下となし、火は炎上となし、木は曲直となし、金は従革となし、土は稼穡となす」とある⁴³⁾。「稼穡」は「穀物の植えつけと取り入れ」。「土」と「田」は容易に結びつく。陰陽師の末裔が「埴」「田」を移住地とした理由がここにもありそうだ。「埴田」とは「土祖・埴安彦命」のイニシャル表記のようなもの、五行の「中央」の意につらなるものと考えられる。

さらに、上の引用に続くのが「潤下は鹹と作し、

炎上は苦と作し、曲直は酸と作し、従革は辛と作し、稼穡は甘と作す」⁴³⁾で、五味を配当している。埴田では米のランク付けを「赤→白→黄」とし「黄」を最も良いものとしていた(埴田町・池田勇氏談)。これに五味を割りふると「苦→辛→甘」となる。良い米は甘い。醎(しおからい)と酸はいわば保存食の味、新米に用いるべき評価ではないだろう。これも陰陽五行思想による統治のなごりではないか。

虫塚と関連した社寺の配置、そして「花祭り」をはじめとした里神楽との関係をみていくと、田中家のルーツは陰陽師(それも名実ともに高位のもの)であり、虫塚は陰陽道に基づき建立されたと考えられる。

<国府村と陰陽師>

埴田の属していた旧村・国府村は平安期に加賀国府が置かれたことに由来する²⁷⁾。律令政府は必要な国に陰陽師を配置した模様であるが³⁶⁾、加賀に陰陽師が配置された記録はない。しかし加賀国府推定地から西約1.5kmにある漆町遺跡から「天罡(北斗七星のこと)」「急々如律令」の語句のある、平安後期の木簡が出土している⁵¹⁾。これらの語句は陰陽師によって用いられたものであり^{15, 51)}、平安期に加賀国府周辺で陰陽師の活動があったことを示す。埴田は古くより陰陽師の活動拠点だったと思われる。

<星空と歴史のロマン>

田中家が陰陽師であったとすると、ひとつ面白い物語ができあがる。埴田村勤兵衛が十村役を努める勤兵衛組に、引越十村の田中家初代・所平が移り住んだのは「部落の南方天山の地」²⁷⁾であった。天山は、明治42年、皇太子(大正天皇)の北陸行啓記念事業としての耕地整理で切り崩され「常に水付きの下向きの田に客土」された²⁷⁾。「天山」は村はずれの「水付き(水害)の地」にあった(続編その1・図2参照)。引越十村として選ばれたものが入るような場所ではない。国府村史には「田中家の系統によると、初代所平なる人が天山に居を構え、その子半兵衛に十村役を司らしめた」²⁷⁾とある。田中家初代・所平は追諡(死後に称号を贈ること)ではないのか? つまり、所平は十村ではなく、陰陽師として「稻荷社」があ

り、「陰陽五行の中心」地たる「埴田」に移り住み、そこで数々の「験」をあげた。それは農耕に関する暦を主とし、時には日蝕予言もあったであろう。しかる後に村人の信頼を得て、子・半兵衛を十村としたのではないか。

所平の就役は正保の頃(1644年)、半兵衛は貞享の頃(1684年)とされる²⁷⁾。通常世襲されるべき十村家が交代する原因となった大きな「験」を上げる「何か」が、半兵衛就役直前にあったはずだ。天文マニアの方はすぐにピーン!と来たであろう。1682年のハレー彗星。ハレーが軌道計算をして1531年と1607年と1682年のものが同じと判断し、次の1758年末~1759年初めの回帰を予測した彗星である⁴⁶⁾。

1607年の記録は陰陽道宗家たる土御門家「家秘要録」に「丑時彗星出現良其長八尺白色也」とある⁴⁶⁾。古記録に見られる彗星尾の長さの単位・一尺は1.5度に相当する(星間距離については一尺=1.0度)²⁹⁾。1.5度×8(尺)=12度の長さであった。1682年のものは「百弍録」に見られる「星有白氣光從西指東長一丈余」の記述⁴⁶⁾。一丈=十尺であるから、1.5度×10(尺)=15度の長さであった。

星空の異変はこれだけではなかった。ハレー彗星の2年前、1680年に巨大彗星が出現した⁴⁶⁾。周期は575年(ハレー)、8800年(エンケ)とも推定されており、我々がこの彗星を見ることはないが、尾の長さは70度にも達したと伝えられ、我国でも多くの記録が残っている⁴⁶⁾。「続史愚抄」には「長五丈余」⁴⁶⁾、すなわち1.5度×50(尺)=75度とある。言うまでもないが、水平線から天頂までが90度。75度の尾はとてつもなく大きい。

半兵衛就役直前の二つの大彗星、これに陰陽師の天文知識をもって対処すれば十村家交代に十分なインパクトとなったはずである。これよりはるか昔の陰陽寮成立以前、舒明天皇(在位629~641年)に陰陽道の知見を提供した僧旻は、舒明天皇十一年(639年)の長星出現に「彗星なり、見ゆればすなわち飢す」³⁹⁾と予言した。彗星は飢饉の予兆であったのだ。

天保飢饉のただなか、天保6年(1835年)には十村・田中家にとっての3回目のハレー彗星が来た。幕府天文方の観測もあったが、加賀藩士・寺

西秀周が当時の最新式器具で観測し、渋川春海（幕府初代天文職）の星図「天文成象図」を用いて、うしかい座からかんむり座、へびつかい座を通してゆくハレー彗星を記している²⁵⁾。老齡の父・清作の補佐に当たっていた三郎衛門はいかなる対応をしたのであろうか。家伝の知識・記録に最新の科学的知見も加え、彗星の来訪も消滅も完璧に予言したかもしれない。屋上屋の空想であるが有り得そうな話に思えてくるのである。

<田中家と土御門家>

さらにこの空想に基づくと「田中家による徳橋組支配」と「土御門家による諸国陰陽師支配」を対比させることができる。

近世に陰陽頭を代々つとめ宮廷陰陽道の中心であった土御門家が、靈元天皇の綸旨と將軍家綱の朱印状により、諸国の陰陽師支配に乗り出したのが天和三年（1683年）¹⁷⁾。土御門家にとっては財政の確保が目的であるが（造曆権を幕府天文方に渡す反対給付ともいわれる¹⁸⁾）、諸国の陰陽師にとっては身分の政治的公認への第一歩であった。いっぽう、徳橋組二代十村役（田中家初代）所平を追諡とすると、田中家による徳橋組の実質的支配は三代十村役（田中家二代）半兵衛の就役、すなわち「貞享の頃²⁷⁾」（1684年頃）に始まり、双方の時期が一致する。このとき陰陽家触頭（地域陰陽師の筆頭者）の許状が発行された記録は摂津・河内・尾張・備中・江戸にとどまっているが³⁴⁾、土御門家は、応仁の乱（1467～1477年）以降の経済的困窮から所領の若狭国名田庄（現・福井県遠敷郡名田庄村）に在住することが多く²²⁾、また、文明十八年（1486年）には所領の越中二上庄（現・富山県高岡市伏木）の年貢を加賀の本願寺門徒に抑留されたと成敗を求めており²⁰⁾、北陸方面への関わり、影響力は強かったとも考えられる。

天明三年（1783年）、徳橋組四代十村役（田中家三代）田中所平のあと、五代十村役は田中家ではなく若杉村八郎兵衛へと引き継がれた²⁷⁾。所平の子・半二（後に六代十村役となる）幼少のため、という理由²⁷⁾であったがはたしてそれだけであらうか？四代・所平の就役期間は歴代の中でも際立って長く67年間におよぶ。元服と同時の就役とし

ても80歳に達していたはずだ。その子が幼少というのはあまりにも不自然ではないか？7年後に六代十村役に就役した半二はわずか8年間の就役で世を去っている²⁷⁾。幼少どころか老壯期に達していたのではないか？

土御門家が、陰陽師新規参入者獲得のための職分改めである「陰陽道改め」を強化したと思われるのが天明四年（1784年）²¹⁾。徳橋組において天明四年は疫病の大流行と大飢饉の年にあたる²⁷⁾。多くの餓死者も出した年、「陰陽道改め」による貢納金を回避し、領内の救済復興を優先させるために「その前年・天明三年から陰陽師ではない他家へ十村役が移っている」との方便を用いたのではないか。「鬼一法眼」の末裔を自ら名乗れば、陰陽道改めを逃れることはできない。版本として流布していた「義経記」⁴⁰⁾に「陰陽師の法師」と明記されているのだ。しかも名主・大庄屋に相当する十村役では、触頭クラスとなり貢納金もきわめて高額となったであろう。統治責任者として“名を捨て実をとる”苦悩も垣間見えてくる。

寛政三年（1791年）、幕府が、この陰陽師支配についての触流しを行い、全国に陰陽家触頭がおかれ、土御門家による民間陰陽師支配が確立するとともに、陰陽師の身分に政治的公認が与えられた⁶²⁾。これと相前後するかのように、寛政二年（1790年）六代十村役（田中家四代）田中半二が就役し、田中家へ十村役がもどっている²⁷⁾。

田中家の動きは全て土御門家にシンクロしているように思えてくる。「二つの大彗星出現に端を発した田中家による徳橋組支配は、疫病と大飢饉を乗り越え、陰陽師の政治的公認の流れに乗って確立されて行った」というストーリーも考えられるのだ。

虫塚と陰陽道の関係について、かなり飛躍した空想も交えながら自論の展開を試みた。次回（続編・その3）では、さらに古代方位信仰や修験道との関連を考察したのち、虫塚建立前後の出来事について概観し締めくくりとしたい。

<引用文献は、（続編・その3）

に一括掲載します>